

障害児を対象としたスポーツクラブの提案(第二報)

—保護者に対するアンケート調査より—

曾根 裕二¹⁾・植木 章三¹⁾・金子 勝司¹⁾・竹内 亮¹⁾・安田 友紀²⁾・
陳 洋明¹⁾・平沼 源志³⁾・後上 鐵夫¹⁾

The proposal of a sport club planned for children
with disabilities—2nd report—
—Suggestions based on responses to a questionnaire
for parent of participants—

Yuji Sone¹⁾, Shouzoh Ueki¹⁾, Shoji Kaneko¹⁾, Ryo Takeuchi¹⁾, Yuki Yasuda²⁾
Yomei Chin¹⁾, Motoshi Hiranuma³⁾, Tetsuo Gokami¹⁾

キーワード：アダプテッド・スポーツ、障害児、スポーツクラブ、アンケート

1. 緒言

文部科学省は2017年3月にスポーツ立国の実現を目指す重要な指針として、第2期スポーツ基本計画¹⁾を策定した。平成33年までに計画的に取り組む施策として、障害者のスポーツ実施率の向上、スポーツを通じた共生社会の実現などが挙げられ、具体的な数値目標と共に示されている。例えば、障害者の週1回のスポーツ実施率は成人で19.2%から40%に向上させる、総合型クラブへの障害者の参加率を40%から50%に向上させる等である。このように社会的に障害者のスポーツに対する機運が高まる中、特別支援学校に在籍する児童・生徒が学校での体育や身体活動をいかに

生涯スポーツに繋げるかが課題となってくる。この点について、齊藤²⁾は特別支援学校に通う生徒たちの身体活動について、在学中は体育やスポーツの時間がある程度確保されるが、卒業後の保証がないことを指摘しており、卒業後の豊かな余暇活動、生活の質(QOL)の確保のためにも生涯スポーツを見据えた視点が必要であるとしている。

大阪体育大学(以下、本学)では、障害児を対象としたスポーツクラブ、わくわくアダプテッド・スポーツクラブ(以下、Adsクラブ)を企画している。Adsクラブは、特別支援学校に在籍する生徒を主な対象として、生涯スポーツの獲得を目的に月に2回程度、午

大阪体育大学教育学部
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

1) 大阪体育大学教育学部 2) 神戸女学院大学 3) 国立特別支援教育総合研究所

前中の時間帯に約90分のプログラムで実施している。2016年9月より開始し、1年以上継続的に実施している。2016年度の活動報告³⁾では、Adsクラブが障害のある子ども達に学校以外の場での運動やスポーツの機会を提供していることを報告し、Adsクラブの意義について述べた。引き続き2017年度もAdsクラブの取り組みを継続し、活動プログラムも一定の流れで行うことができています。2017年度Adsクラブの活動の様子を写真1、写真2、写真3に示す。

また、2017年度Adsクラブ参加者の概要について表1に示す。2016年度から参加を継続した者が13名、2017年度より新たに参加し始

めた者が2名の計15名である。2017年度は12月末現在で17回の活動実績がある（11月は1回のみの実施であった）。毎回の活動には平均すると10名弱の参加者がある。一方で、2016年の活動報告で課題として挙げられた通り、参加者や保護者への聞き取りを通してのプログラムの検証は行われてこなかった。

そこで本研究では、参加者の保護者に対し、活動プログラムに関する質問を行い、Adsクラブの活動プログラムが参加者にとってどのような効果があったのか検証する。



写真1：ウォーミングアップの様子



写真2：個別活動（卓球）の様子



写真3：全体活動（ならびっこ野球）の様子

表1：2017年度わくわくアダプテッド・スポーツクラブ参加者の概要

	小学生	中学生	高校生	卒業生	計
男子	1名	6名	5名	0名	12名
女子	0名	1名	1名	1名	3名
療育手帳	小学生は、参加者の兄弟である。 卒業生については、他の参加者からの紹介により参加を希望した者である。 A:7名、B1:2名、B2:3名、不明:2名 身体障害者手帳保有:2名 ※療育手帳と身体障害者手帳の両方を持つ者1名を含む				

2. 方法

2-1. 対象

本研究の対象は、2017年度Adsクラブに登録のあった参加者15名の保護者とする。

2-2. 調査方法

2017年10月14日、21日のAdsクラブ実施の際、対象に対し、活動に関するアンケート調査を行なった。質問項目は、Adsクラブに参加してからの参加者の家庭や学校での生活の様子について、Adsクラブへの要望や感想、また、Adsクラブのプログラムについての評価であった。プログラムについては、活動時間、活動内容、学生の対応の三項目について、それぞれ五件法にて調査した。また、これまでの活動の中で引き続き取り組みたいものについて、リストの中から複数選択することとした。家庭や学校での様子については自由記述とし、得られた回答については複数名のAdsスタッフ間で協議の上、類似した回答をカテゴリ化する事とした。

尚、対象者には2017年の4月の時点でAds

クラブの目的について十分に説明し、データの研究利用や写真、動画の撮影に関して、書面にて同意を得ている。また、本調査に用いたアンケートについても配布時点で内容に関する説明を行い、個人情報等への配慮、研究データとしての利用の可能性を伝えたくえて、自由意思によりアンケート調査への協力を得た。

3. 結果

対象者のうち、10月の実践に参加した保護者8名からアンケートの回答を得た。

3-1. プログラムについて

Adsプログラムの活動時間については、7名が「ちょうど良い」、1名が「やや長い」という回答であった。「短すぎる」、「やや短い」、「長すぎる」という回答は無かった。活動内容については「良い」が8名であり、活動内容に対する否定的な回答は無かった。学生の対応についても「良い」が8名であり、学生の対応に関する否定的な回答は無かった。以上、図1、図2、図3に示す。

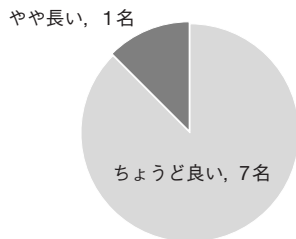


図1：活動時間（90分）について

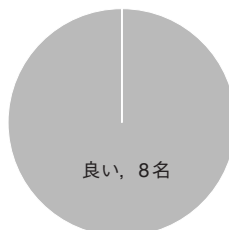


図2：活動内容について

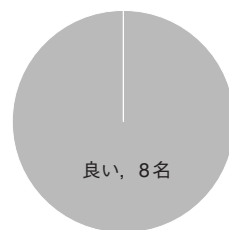


図3：学生の対応について

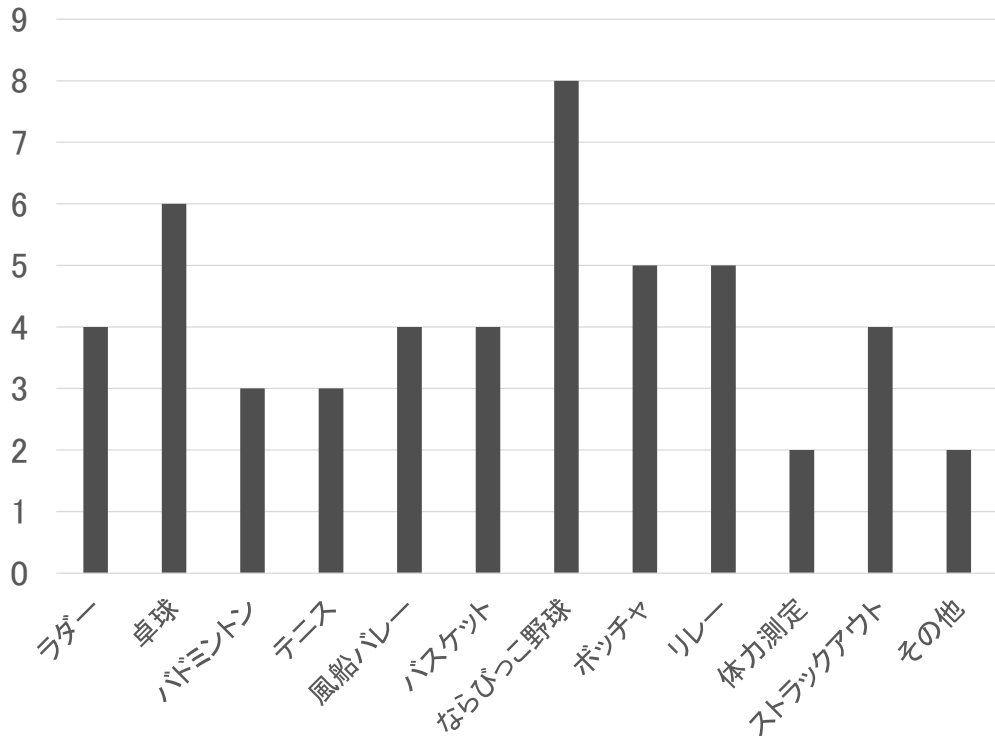


図4：引き続き取り組みたい活動

また、引き続き取り組みたい活動については、「ならびっこ野球」が8名、「卓球」が6名、「ボッチャ」、「リレー」が5名と過半数の対象者からの回答があった。以上、図4に示す。

3-2. Adsクラブ参加者の家庭や学校での様子について

Adsクラブに参加するようになって、保護者の目から見て参加者の日常生活に変化があったかという問いに対して、自由記述にて回答を得た。家庭での様子については、「Adsクラブを楽しみにしている様子が見られるよう

になった」と答えた者が4名であった。その他、「身体を動かすことが好きになったり、スポーツに興味を持つようになった。」「(Adsクラブに)早く参加したいので手伝いをするようになった。支度が早くなった。」などの回答が得られた。学校での様子については「体育の授業や運動会での活動に積極的になった。苦手意識が減った。」と答えた者が4名であった。その他の回答も含め、家庭や学校での様子について一覧にしたものを表2に示す。

表2：Adsクラブに参加してからの家庭や学校での様子

家庭での様子
<ul style="list-style-type: none"> ・ Adsクラブを楽しみにしている様子が見られるようになった。【4名】 ・ 身体を動かすことが好きになった。スポーツに興味を持つようになった。【2名】 ・ 早く参加したいので手伝いをするようになった。支度が早くなった。【2名】 ・ 他人に対して興味を持つようになった。【1名】 ・ 家庭では今までと変わりはない。【1名】
学校での様子
<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育の授業や運動会での活動に積極的になった。苦手意識が減った。【4名】 ・ (昼休みに体育館に行きたいから)給食を食べるのが早くなった。【1名】 ・ 友だちとの行動が早くなった【1名】

表3：Adsクラブに参加しての感想・要望

要望
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後もずっと継続してほしい。【4名】 ・ 身体の使い方を知ってほしい、投げ方や打ち方などの指導をしてほしい。【1名】 ・ やったことのないスポーツをたくさん経験させたい。【1名】
感想
<ul style="list-style-type: none"> ・ 今後(卒業後)の暮らしにつながると思う。【1名】 ・ 学生や教員の対応が良い刺激になっている。【1名】 ・ 遅くても上手くできなくても大丈夫、という場合は続けたい。【1名】

3-3. Adsクラブに参加しての感想、今後の要望について

Adsクラブへの要望や感想について、「今後もずっと継続してほしい。」と回答したものが4名であった。その他の回答について一覧にしたものを表3に示す。

4. 考察

4-1. プログラムについて

プログラムの時間、内容については概ね好評であった。Adsクラブでは90分を30分ずつ

に分け、活動を展開している。「準備運動と動きづくり」として、全体での体操、ラダーやマーカー、リングなどを用いたランニングの時間、「個別の活動」として、卓球やバスケットボールなど、用意した活動の中から参加者の興味や関心に応じて学生スタッフと個別に取り組む時間、「全体の活動」として参加者全員がゲームに参加できる活動の3プログラムである。プログラムの内容は、毎回少しずつ異なるが大きな流れとしては年間を通じて統一している。このようにプログラムの流れを一定にすることで、参加者は見通しを持って、

それぞれのペースで参加できているものと考えられる。

学生スタッフの関わり方についても全対象者が「良い」と答えている。Adsクラブでは、プログラム開始の約90分前に学生スタッフが集合し、準備、ミーティングを行っている。ミーティングの中では前回記録の確認を行い、参加者とのかかわり、プログラムの進め方に関する疑問点、改善点を全体で共有するようにしている。ミーティングの時間を確保することで参加者とのかかわりやプログラムのポイントの共通理解が得られていると予想される。アンケートにおける記述でも「なかなか集団活動に入りづらい子ですが、先生方がうまく誘導して下さるので助かります。これからもこのまま関わり続けてもらえたらうれしいです」、「学生さん達が気さくに声をかけて下さるので、それもすごく刺激になっているようです」というコメントがあり、特定の誰かと言うよりも学生スタッフ全体で活動を創っていることがうかがえる。特別支援学校における球技教材について事例的に検討した星・玉村の報告⁴⁾によると、重度知的障害児を対象とした体育の授業では、一人ひとりの実態の違いや年齢段階を考慮した教材を扱う場合、教師集団による集団的な教材研究を行いながら取り組む実践が求められている。Adsクラブにおいても、リーダーとなる学生だけがプログラムを考えるのではなく、学生スタッフ全体が参加者一人ひとりのことを考

えながら活動内容を検討していくスタイルを継続させる必要がある。

その他、「体の使い方を知ってほしいと思います。ボールの投げ方、ラケットの握り方、蹴り方、打ち方など、ちょっと直したらよいと思うこと等」、「これからもやったことのないスポーツを経験させてほしいです」というコメントもあり、プログラムの流れは確保しつつも、参加者や保護者の要望に応えられるような、スタッフ個々の指導スキルの向上、新しいスポーツの創造については求めていく必要がある。

また、引き続き取り組みたい活動として、ならびっこ野球、卓球、ポッチャ、リレーなど球技種目が複数挙げられているが、文部科学省の学習指導要領解説⁵⁾によると、球技の指導においては、学習課題を追求しやすいようにプレイヤーの人数、コート広さ、用具、プレイ上の制限を工夫したゲームを取り入れながら、学習を展開することが求められている。Adsクラブの活動は学校体育とは異なるものの、生涯にわたってスポーツに親しむための土台作りという点では、一致しており、今後も既存のスポーツ種目を参加者に合わせて工夫していく、いわゆるアダプテッド・スポーツ⁶⁾の観点から活動を展開していくことが求められる。アンケートの自由記述においても「親しむ、楽しむの根幹をサポートしてもらい、ともに楽しむ気持ちが味わえ、今後に繋がる健康な暮らしの礎となると思ってい

ます」という回答もあり、Adsクラブが生涯にわたってスポーツに親しむための土台作りの一端を担っていることが示唆された。

4-2. Adsクラブ参加者の家庭や学校での様子について

Adsクラブに参加することで「運動に対して積極的になった」、「苦手意識が減った」とするコメントが多かった。Adsクラブではアダブテッド・スポーツの考え方⁶⁾に従い、参加者に合わせた形で活動を展開している。例えば、投げられたボールをバットで打つのは難しいが、ティー上に置かれたボールは打てる。というように参加者の『できる』部分を活かせるような工夫を常に考えることが、参加者の運動に対する自信や苦手意識の軽減につながっているものと考えられる。初心者のマラソンサークル参加者のマラソン継続の要因をグループインタビューにより検討した岡本・山原らの報告⁷⁾によると、スポーツ参加継続の要因として、仲間からの励ましなどの言語的説得、身近な存在である仲間からの代理体験、自身の成功体験などの自己効力感を高める体験が特定されている。Adsクラブでの活動において様々な工夫を行うことが参加者の成功体験の積み重ねに少なからず影響していると考えられる。更に成功体験を通して自己効力感が高まれば、特別支援学校卒業後の生涯スポーツにも繋がるのが期待される。

また、家庭や学校での様子についての回答

の中には「(早く参加したいので)手伝いをするようになった」、「(昼休みに体育館に行きたいから)給食を食べるのが早くなった」、「友だちとの行動が早くなった」というコメントも見受けられた。家庭でのお手伝いや学校での友だちとのかかわり、適切な食事の速度など、社会生活を送る上で必要な技能、いわゆるソーシャルスキルが高まったという解釈も可能であろう。もちろん月に2回程度のAdsクラブの活動が、参加者のソーシャルスキル獲得にどの程度の影響があったのかは疑問の残るところであるし、在籍学校での学習や教員、友だちとのかかわり、家庭での過ごし方など、様々な経験が影響した結果であると考えた方が自然であろう。しかしながら、「体育・スポーツ教育は社会的スキルを学ぶよい機会を与える」と市村・中川⁸⁾が述べているように、スポーツ経験とソーシャルスキルの獲得は関係が深いことは知られている。その意味からもAdsクラブの活動がスポーツ場面だけでなく日常生活にも好影響を与える可能性があることを踏まえながら、Adsクラブの実践においても参加者同士のかかわりが自然と生じるような活動を意図的に組み込むなども検討する必要があるだろう。

4-3. Adsクラブに参加しての感想、今後の要望について

Adsクラブへの要望では、「遅くても上手くできなくても大丈夫、という場は続けたい」

「なが〜く続くことを期待しています」という回答に代表されるように、次年度以降も継続して参加を希望する回答が多くみられた。Adsクラブの内容が評価されていると捉えることも可能であるが、総合型地域スポーツクラブでの障害児・者の受け入れは障害の程度によっては参加の機会が限定的となっていることも指摘されており⁹⁾、障害児・者のスポーツ活動の場が十分とは言えないという社会的な背景も理解しておく必要がある。

また、Adsクラブは、生涯スポーツの獲得を主な目的としているが、自由記述の中で「親しむ、楽しむの根幹をサポートしてもらい、ともに楽しむ気持ちが味わえ、今後に繋がる健康な暮らしの礎となると思っています」というコメントもあり、Adsクラブが学校での体育と生涯スポーツとの懸け橋になり得る可能性も考えられた。

4-4. Adsクラブの課題

今回のアンケート調査では否定的な意見はほとんど見られなかったが、参加者の実態は毎年変わり、プログラムの内容もその都度検討していく必要がある。また、今回の調査は、参加者の保護者に実施したものであり、参加者自身の意見を聞いたものではない。知的障害の程度や実態は一人ひとり異なり、意見や自らの思いを言語化するのが難しい場合も少なくないが、活動への参加状況や表情等、様々な表出を観察しながら、参加者自身の思いを

汲めるような方策も必要であろう。

更に、Adsクラブは年間を通じての活動のため、教育実習期間、長期休業中の学生スタッフの確保なども解決していかなければならない事項である。その為には、学生スタッフにとってAdsクラブでの経験が自らの成長にどう役立つのか、指導スキルがどのように上がっていくのか等、学生スタッフに対する調査、参加者本人に対する聞き取り等も必要であると考えられる。

5. まとめ

大阪体育大学の特色あるプロジェクト計画の研究事業の一環として創設された「Adsクラブ」の活動内容について、参加者の保護者へのアンケート結果を元に検証を試みた。その結果、プログラムの時間や内容、学生スタッフの関わりについては概ね高い評価であり、参加者が生涯に渡ってスポーツに親しむための土台となっていることが期待された。また、参加者のソーシャルスキルの向上に寄与している可能性も示唆された。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画。
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/gaiyou/1382785.htm
- 2) 齊藤まゆみ (2014) 特別支援学校の体育. 体

- 育の科学64(6). 402-405.
- 3) 曾根裕二・植木章三 他(2017) 障害児を対象としたスポーツクラブの提案～“わくわくアダプテッド・スポーツクラブ”の事例～. 大阪体育大学教育学研究1. 35-42.
 - 4) 星幸敏・玉村公二彦(2012) 特別支援学校高等部における体育の授業づくり - 重度知的障害児に対する球技教材の教育的価値の検討 -. 奈良教育大学紀要61(1). 69-80.
 - 5) 文部科学省(2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編.
 - 6) 植木章三・曾根裕二・高戸仁郎(2017) イラスト アダプテッド・スポーツ概論. 東京教学社.
 - 7) 岡本佐智子・山原春子・江守陽子(2010) マラソン大会開催地域の自主サークル参加者によるマラソン継続の要因. 日本健康教育学会誌18(4). 278-288.
 - 8) 市村操一・中川昭(2002) 体育と社会的スキル教育. 体育授業の心理学. 大修館書店: 東京、pp.104-109.
 - 9) 奥田陸子(2007) 総合型地域スポーツクラブへの障がい者の参加システム構築のための調査研究:障がい者の参加状況と受け入れ体制の構築に向けたクラブの課題. 金沢大学経済論集, 42, 157-185.